

方 言 に よ る コミュニケーション・ギャップ

— 学生の意識に基づく考察 —

関 口 進

は じ め に

第一経済大学の学生は九州、四国、中国を中心に東日本にも及ぶ広い地域の出身者で構成されている。「言葉は国の手形」と言われるように、それぞれの学生はこれまでに生活した地域や家庭で身につけたことばを持って、福岡という土地で多くの人々と出会いことばを交わすことになる。そこで今まで聞いたことのないことばに接しコミュニケーション・ギャップを体験する。もし、東京圏にある大学に入学したとすれば、会話のとき使うことばを「共通語で」という意識がより強く働くであろう。しかし、福岡の場合はより多くの方言が使われるのではないかと考え、できればコミュニケーション・ギャップの克服の過程でどんな言語行動が取られるのか、また、言語面にどんな変化が見られるのか調査し分析したかった。結果的には20人の学生との1人30分程度の短い面接調査に終わり、十分な分析を行うまでには至らなかった。そこで、得られた面接調査をもとにして、方言によるコミュニケーション・ギャップのいくつかの面を取りあげてみたいと思う。

私自身、埼玉県に生まれ育ち、NHKのアナウンサーとしての勤務地が東京以外では北から北海道函館市、岩手県盛岡市、宮城県仙台市、そして大阪市であった。こうした土地での生活を通して多くのコミュニケーション・ギャップに遭遇したが、基本的には私が共通語を仕事の道具としているために会う人々

からは共通語しか使わない人間として見られ、相手はこちらに合わせて共通語を使う努力を払うことが多かった。状況としては方言のぶつかり合いとはいえないのである。

さて、本校の学生はどうであろうか。平成2年度に「日本語表現論」を履修した学生のうち108人に日本語に対する関心を記述してもらった。ずば抜けて多かったのが方言についてのもので48人、44%であった。ほかに標準語・共通語について書いた学生が11人で、両者を合わせる過半数になる。それらの中から要点をいくつか抜き出してみる。

- A 私は東京から福岡に来て新しい友人が沢山できました。福岡出身者は1人だけであとは西日本を中心とするいろいろな県の出身者です。このような友人たちと話をしていると時々意味がわからない言葉が出てきたり、語尾のイントネーションが違ったりします。その言葉の違いでケンカを売られるのかと思ったときもありました。福岡の人にはこっちのことばは乱暴だけどケンカなんて売ってないから」と言われたことがあります。たしかに乱暴な感じもしますが慣れてきたら何かあったかみがあるように思います。
- B 私は山口県下関市の出身です。いろいろな方言を聞いていると北の方へ行く程単語が長く、南へ行く程短いような感じがします。方言は共通語から離れる度合いが大きい程聞きとりにくくなりますが、人間味は増すものだと思います。
- C 私は山口県小野田市の出身ですが、これまでテレビを見ていて理解できそうもないと思ったことばは沖縄や鹿児島の方言です。でも今では年をとった人たちが話していることばで若い人の間では使われていないということでした。方言はとなりの県でも通じないことばがある反面、遠く離れていても通じることばがあり面白いと思いました。
- D 私は博多の出身です。前にテレビで博多弁の特徴をあげていました。その一つは寒い日に「冷える」というのを「すうすうすう」と言ったり、何かものを確保しているとき「取ってます」というのを「とととと」と言

ったりして同じ音が続くことです。他の方言にもおもしろいことが沢山あると思います。

E 私は19年間住み慣れた大阪から福岡にやってきたので、不安の一つは九州の方言を理解できるかどうかということでした。今でも時には理解するのに少々時間がかかることもあります。学生仲間はほとんどが福岡県以外の出身者なので私にとっては面白く、広島や岡山出身の友だちの場合、それが明かされるまで九州の人かと思っていました。千葉出身の友だちの場合は、おそらく東京の人だろうと予想していましたが、先ずは当たったというところです。

F 私は静岡の出身ですが、大学に来てできた鹿児島出身の友だちに「なまってるね」と言われたとき、少し首をかしげたくりました。自分を鹿児島の人の立場においてみるとうなずけました。また、コミュニケーションの上でのテンポが土地によって違うように思います。

G 福岡は共通語に近いイントネーションですが、私の出身地の鹿児島では全く違ったイントネーションです。自分は標準語で話していると思っても、他の県の人と話してみるとイントネーションの違いがはっきりとわかってしまいます。

H 私は岡山県倉敷市の出身で、小学校の頃父の転勤で東京に3年間いました。その時、岡山弁がみんなに通じないし、また笑れることもありました。逆に東京の先生が何を言っているのかわからず、成績も落ちてしまいました。今なら東京の人に対しても胸を張って岡山のことばを使えるのですが、その方言が私たちの年代では次第に忘れられて行くような気がします。時とともにことばというものが変わってきたのはわかりますが、今は急激に変化しているように思います。

以上、引用した記述を見るだけでも、大学生活を通して聞く方言について、学生のさまざまな指摘を読み取ることができる。それは、方言の語い、イントネーション、文法、さらには、方言分布、言語意識など多岐にわたっている。今回の研究ノートでは、言語行動、共通語意識、方言の地域差・年齢差・場面

差について取りあげてみたい。

(1) コミュニケーション・ギャップと言語行動

会話の進め方は十人十色であるとしても、私たち日本人に共通する話しことばや話し方の特質を認めないわけにはいかない。水谷修氏は「りんごを5つほどください」とか「30人ぐらい集まった」の「ほど」「ぐらい」といったことばは必ずしも程度を表すだけで使われているのではなく、あえて加える必要のない「ほど」や「ぐらい」を加えるのは「話し手自身が明確な形で相手の意志に触れないようにするためである。」¹⁾としている。これはコミュニケーションのストラテジーとしては、相手への思いやりであり、相手にその場面で判断に参加できる余地を与えているのである。

学生が方言によるコミュニケーション・ギャップに出会ったときはどんな態度を取るのだろうか。聞き手の立場でみると次の三つのケースがある。第一は使われた方言の意味がわからなくてもそのままにする。第二はくり返し言ってもらう。第三は何と言ったのか共通語でたずねる。

第一のケースが面接調査では一番多かった。これは日本人の言語行動の一つの特徴である。相手の言ったことが聞き取れない場合、「そうですか」と言って、笑ってごまかしてしまうという受けこたえが見られる。「自分には相手のことばを理解する能力が備っていないのでわかりません。」あるいは、「よくわかりませんが、多分あなたはこういう意味のことを言われたのでしょうか。」というように、全くわからないままですませたり、自分勝手に相手のことばを判断するという行動を取る。これは第三のケースと極めて対照的である。何と言ったのか相手にたずねるとはっきり答えた学生は20人中、2人しかいなかった。

第二のケースを示す学生は、くり返して言ってもらうと相手がゆっくり言ってくれるのでわかりやすくなるとか、二、三回聴くうちにわかってくと答えていた。これは、ことばの発音、アクセント、イントネーションといった要素がからむ問題でもある。この点については方言の地域差のところでふれてみたい。第二のケースで、時には何回も聞き直して相手とケンカになりそうになっ

たことがあると話した学生がいた。今日のように共通語が普及している時代では、むしろ、第三のケースのように率直に「おっしゃったことがわかりませんが、共通語ではどんな意味ですか」と聞いた方がいい場合もあるということである。英語には Beg your pardon. という表現があって、これは、「失礼しました」とか「失礼ですが」の意味のほか「すみませんが、もう一度おっしゃって下さい」の意味に使われる。単に Pardon? だけでも「もう一度おっしゃって下さい」の意味になる。相手のことばがわからなかったときは聞きかえすのが一般的だということであろう。方言によるコミュニケーション・ギャップに出会った日本人は、相手の方言がよくわからないのと同時に、自分の方言も相手によく通じないことがあるようだと思っており、お互に何回か相手の方言を聴いているうちにわかるようになって考えている。これは相手の意志にさからわないでお互を理解しようとする態度であり、両者が共通の枠を作ろうとする行動とも言える。

第一から第三までのケースは相手の話す方言を聞く立場での行動のパターンであったが、方言を話す立場ではどうであろうか。聞き返されたり、意味を聞かれた方言はその後使わないようにするという消極的な態度に出る学生が面接した人の3分の1近くあった。次に多かったのが自分の話すことばは大体共通語であるという認識を持っている学生である。共通語に対する意識はあとで述べる。ほかの答えとしては、「相手に反応がないときは言いかえる」「意識しないで方言を使う」というものである。

以上見てきたように、方言によるコミュニケーション・ギャップの克服の場面では日本人の言語行動、会話の態度として指摘されている「思いやりのストラテジー」の特徴がはっきり読み取れる。「思いやりのストラテジー」と呼んでいるのは渡辺吉鎔（キルヨン）氏であるが、それは Tannen の見解、No Involvement Strategy に基づいている。訳せば「関わり合いを拒む言い方」であり、会話の相手や状況や話の内容に対して大きく距離を保つストラテジーとされる。渡辺氏は日本人と対照的なもう一つのストラテジー、Tannen の言う Camaraderie Strategy（「親愛の仲間意識を強調する言い方」）を韓国人のスト

ラテジーに当てはめて「親愛のストラテジー」と呼んでいる。韓国人の場合は日本人と反対に、他人との心理的な距離をできるだけせばめて相手と活発な相互作用をはかる。それが日本人には自己主張をしてお互いに言い合っているように見えるとしている。日本人の「思いやりのストラテジー」では自分の思うことと相手の思うことがくい違っても会話の中でお互いに歩み寄る努力をすることになる。渡辺氏は、「この種の会話の型の背景には摩擦をおそれ嫌うとともに Rapport（呼応）に高い価値をみとめる日本人の価値観が横たわっているであろう。」²⁾と述べている。

方言によるコミュニケーション・ギャップに学生が遭遇したときも、ギャップを積極的になくそうと努めるのではなくて、コミュニケーション・ギャップを明確にさせないでいずれギャップはなくなるのであろうという行動を取る。コミュニケーション・ギャップの克服というより回避である。

（2）共通語化と共通語に対する意識

A 共通語化

学生の面接調査によると、福岡市およびその周辺地域は共通語化が進んでいるので方言によるコミュニケーション・ギャップで困ることは少ないという結果が出ている。たしかに語いの点から見ると方言に取ってかわった共通語の語いが年とともに増加していることが考えられる。

ここで、共通語と標準語という用語についてふれておきたい。柴田武氏によれば、共通語ということばを標準語と区別して使うようになったのは昭和24年から26年にかけてであるという。昭和24年に国立国語研究所が福島県白河市で共通語化の実態調査を行った。そのとき、調査の対象となる、ある発音が東京の発音と全く同じでなければならないとすると白河市民のほとんどすべてがその基準からはずれてしまうのである。そこでゆるい基準を設けそれに沿ったことばが共通語で、きつい基準に沿うことばが標準語というように仮の名称として採用した。そして柴田氏の共通語の定義は次のようになる。「全国どこでも通ずるようなことば。」「地域的とは言えないことば。」「どの地方の出身かわ

からないようなことば。」これら三種の言い方で特に強調していることは「共通語は、東京語に近いが、しかし、東京で一般に使われていることばと、必ずしも一致はしない。」³⁾と柴田氏は述べている。そして、標準語の定義に関しては、石黒魯平が昭和25年「標準語」の中で、「東京語を土台にして、能率的に、合理的に、情味的に、知性的に、倫理的に、それを高いものにして使^マを^スと、日本民族各員が追求する理想的言語体系」が標準語だと考えたが、これが今の標準語に当たるとしている。しかし、現在、日本には国がきめた規範的な言語は存在せず、標準語に近い共通語は存在していると言うことができよう。このノートでも共通語と標準語両方の用語を混用することがあるが、標準語の意味は共通語に等しいということである。

さて、真田信治氏の研究に標準語形の分布率がある⁴⁾。その全国順位を見ることにしよう。標準語形の地理的な分布を調べるに当たって用いられたのは、国立国語研究所が1966年から74年にかけて発表した「日本言語地図1～6」の中の82項目である。この「日本言語地図」に項目名としてあがっている形を標準語形としているが、それぞれの語形の音声変種については次の三つの原則を採用している。①語中や語尾のガ行にはふつうの濁音も鼻音も入れる。②チ、ツにはティ、トゥも含める。③セにはシェ、ヒェも含める。また、標準語形がほかの語形と併用されている場合は、単独で用いられている場合と同じに考えている。

言語地図の上に見られる標準語形の地点を数え、都道府県ごとに集計して、それぞれの都道府県における、全調査地点に対する標準語形の現われる地点の数の割合が標準語形の分布率である。82項目を平均した分布率を見ると第1位はやはり東京である。率は61.6%。そして、関東地方の県、北海道、長野、山梨、静岡の各県が上位に並んでいる。平均分布率の一番低いのは沖縄県で、福岡県は34番目である。

次に、82項目について見ると、いろいろな特徴を見出すことができる。一つは東京を中心とした関東地方に基盤を持つ標準語形が多いということであるが、その一方で、近畿地方を基盤とする標準語形がかなりあるということである。

例えば、西部方言に属する「梅雨」のツユ、「鱗」のウロコなどが、今は標準語形、つまり、共通語の地位を占めている。これらの単語は関西から江戸に入り、その後、全国に広がって共通語になったものである。九州の方言の研究によると、中央から遠く離れている関係で、室町時代末期から江戸時代初期にかけては中央の京都語で失われた言語的特徴が九州に残り、今に至っているものがかなり見られるという⁵⁾。

大学生の言語面での調査では、山本俊治氏が、1969年4月に武庫川女子大学に入学した女子学生から100人を抽出して行った大阪方言の動態がある。それによると、女子青年という立場、さらに学生という立場から、共通語にはきわめて意識的であり、方言の共通語化の面を強く示したという⁶⁾。今回の学生の面接調査でも、自分が共通語で話しているという意識が多く見られたし、自分がこれまで生活してきた地域で多くの共通語が使われていると見る学生が多数を占めた。そして、共通語化と関係が深いのはマス・メディア、特にテレビ放送である。テレビ番組に登場する人物のさまざまな話から共通語の話しことばを学び取っている。ただ、鹿児島出身の学生だけは、「自分の出身地では、標準語を使うのはアナウンサーぐらいで、普通の人が標準語を使うと何となくその人だけが浮いているように感じられる。」と感想を述べている。

B 共通語についての意識

コミュニケーション・ギャップのもとになる言語面での相違は、語い、語法のはかに、発音、アクセント、イントネーションなどの音声表現がある。学生もこの面で共通語との違いを強く意識している。先ず、近畿地方、特に大阪出身の学生は、大阪と東京とではアクセントが逆になると感じている。たしかにそのような単語は多い。また、大阪出身の学生が、西日本のことば、中でも、近畿、中国、四国地方のことばは聞いていてわかりやすいと言っている。これもアクセントやイントネーションに深い関係がある。アクセントについて見れば、中国地方の大部分は東京式アクセントであり、近畿、四国地方の大部分は京阪式アクセントだからである。次に、鹿児島出身の学生が標準語との違いを意識したイントネーションというのは主としてアクセントの違いである。この

地域は東京式や京阪式ではない二型式アクセントに属している。岡山県倉敷市出身の学生は、九州地方のことばには全般的に違いを感じるが、北海道のことばは聞いていて気持がよく、共通語に近いと感じている。これもアクセントの特徴をついている。

対人コミュニケーションで共通語を使うと「気取っている」と言われることがあると、複数の学生が答えていた。こういう場合は、ギャップがあるにせよ進んで方言を使うことになる。ここで、共通語に対する語感について述べておきたい。

NHK が1983年に大阪で行った調査がある。「共同研究——地域社会における放送の役割」というもので、その中の一つである⁷⁾。放送できく共通語の語感について大阪の人たちは高い評価を与えた。上位を引用すると、正しい69%、分かりやすい69%、品がいい64%、美しい63%、といった結果である。（本校の学生の調査でも共通語はきれい＝美しいという評価があった。）これに対して関西弁に対する評価は、正しい7%以下、分かりやすい29%、品がいい7%以下、美しい8%、というように対照的である。しかし、マイナスの評価を含む項目を見ると、共通語に対してかなり数値の高いものがある。多い方から5項目取りあげると、速い40%、形式的40%、冷たい26%、堅苦しい23%、とりすましている23%、となっている。放送できく関西弁について高い評価を得た項目というのは、親しみやすい75%、気やすい70%、やわらかい62%、ユーモラス61%、あたたかい55%、などである。学生の調査でも大阪出身者は、共通語の話しことばには表情がないと言った。これはNHKの調査の「形式的」や「とりすましている」に相当し、自分にとっての生きたことば、つまり、方言でないと感じ取ることがむずかしいのである。また、話す立場の意識として山口出身の学生が、方言で話すときは腹を割って話をすることができると言っていた。この場合、方言によるコミュニケーション・ギャップはあるが、相手に伝えるメッセージがよりふさわしいものになるということである。このように、方言に人間味やあたたかみを感じ方言を大事にしたいという気持は学生の調査にも表われていた。

以上のような面はあるにせよ、方言によるコミュニケーション・ギャップを生じて、言いかえるときには共通語を使う。そしてもう一つ、学生が共通語を使わなければならないと思うケースは、敬語にかかわる表現を用いるときである。まず、地位の上下関係、客と店員などのように立場上の違い、あらたまった場面といった状況の違いによって共通語を使わなければいけないと考えている。学生のアルバイト先では客が福岡弁を使うので福岡弁を覚えなければならないが、「いらっしゃいませ」など、きまったあいさつ言葉は共通語を使う。この点、大阪弁でも「お出でやす」「お越しやす」のあいさつが「いらっしゃい」と交代中であるという⁸⁾。次は、語法に関係するものである。丁寧に言おうとするとときに、例えば次のように共通語に言いかえる。

よかね、よかですか → よろしいですか

～しととですが → ～しておりましたが

大阪出身の学生の一人は「～言うてはった」という表現を共通語に言いかえようとするとなくなってしまうと答えていた。これは方言ではあっても敬語表現である。共通語の「おっしゃっていた」あるいは「おっしゃっていました」という言い方をふだんしていないと言いかえもむずかしい。敬語にはこのようなこともある。

（3）地方共通語や方言の親縁関係への意識

地方共通語あるいは地域共通語という用語がある。これは全国共通語に対して、ある限られた地域で方言のほかに広く使われることばである。柴田武氏によれば、「キビス」（全国共通語では「カカト」）は近畿、中国、四国地方の地方共通語であるという。キビスは古語が残ったもので、共通語でも「きびすを返す」などという慣用句としては使われる。私たちが知っている方言や使う方言は、自分が生まれ育った土地のものだけではなく、ほかの地方の方言がまじることもある。さらに、今日のようにテレビ放送が普及し、番組の中に共通語だけでなく、さまざまな地域、地方の方言が登場し耳に親しむようになると、そうした方言の一部が自分の使うことばに入ることもあり得る。

学生の面接調査で、方言によるコミュニケーション・ギャップがあまり大きくないのは、一つには、共通語をより多く使おうという態度によるが、もう一つは、地方共通語やある方言が離れた地域にも分布しているといった現象に負うところがある。単語そのほかで親縁関係を強く感じている例を学生の話から取りあげてみると、徳島県阿南市の学生が福岡弁より大阪弁に、より親近感を持っている。それは発音や語法などが大変よく似ているという意識である。例えば、「～せなあかん」(＝～しなくてはいけない)「言うたらなんやけど」と言うし、打消の意味で、「書かなんだ」とか「書かんかった」という表現が使われる。さらに、福岡弁と共通する表現では、理由の意味の「～けん(＝～から)」があり、「書くけん」のように言う。

方言の中には広く全国的に分布していることばもある。香気や匂いのことをいう「カザ」や、うらやましいという意味の「ケナリイ」「ケナルイ」がその例である。これも「キビス」同様、古語が残っているものである。理由の意味の「～けん」にしても、もとは「ケニ」であって、かつて京都では「～サカイニ(＝～だから)」よりも「～サケニ」を用い、この「ケニ」は九州の「ケン」や中国地方の「ケニ、キニ、ケー」とも親縁関係にある語であった⁹⁾。この「ケニ」は、頭に「サ」がついてさらに変化した形が全国に広がっていて、近畿地方の「サカイニ」など、北へ向かっては、東北地方の山形県や青森県で「サケ」から「シケ」に変っている。

学生は方言の地理的分布を知っていて方言の親縁関係を読み取るわけではないから、語形や意味が同じ場合に親縁関係を感じ取っているということである。京都府出身の学生は同じ近畿地方の兵庫県、滋賀県、和歌山県、大阪府出身の学生とは、京都府出身の人かと思ひながら会話を交わしていたと話している。

(4) 方言の地域差について

第一経済大学にも日本の広い地域から学生が集まっているが、都会やその周辺の住宅地には転勤者や仕事を求めて移り住む者、さらにはビジネスや旅行で一時滞在する者などがふえ、その土地以外の出身者が互にことばを交わす機会

が多くなっている。こうした状況のもとでは自分の出身地の方言を互に用いて話す機会が以前より減少していると言える。相手が自分の出身地以外の土地の出身者だと思えば、方言は押さえられ、より共通語に近いことば遣いになる。学生の面接調査で、方言によるコミュニケーション・ギャップがそれ程多くなかった原因の一つにはこうしたことがあるかもしれない。ここでは、福岡弁を中心にコミュニケーション・ギャップに関係する地域差について取りあげてみよう。

先ず、学生が語いの点では共通語化が進んでいると見ている福岡市で地域差を感じるのはアクセントである。福岡弁は方言区画では筑前方言に属し、アクセントは大分県や、福岡県の豊前地方に行われる東京式アクセントの変化したものが主流である。平板型がなくて、動詞や形容詞の場合は中高型に一型化している。カラダという名詞は $\overline{\text{カラダガ}}$ というように平板型にならず、 $\overline{\text{カラダガ}}$ というように中高型になる。福岡県南部の筑後地方や佐賀県の北半分はアクセントの型の意識がない、無アクセント、さらに佐賀県南西部、長崎県、熊本県西部、鹿児島県の大部分は、二つの型に分かれる二型アクセントである¹⁰⁾。そのA型の1例「つけもの」は長崎では $\overline{\text{ツケモノ}}$ 、B型の例「あさがお」は $\overline{\text{アサガオ}}$ となる。九州地方のアクセントは大分県の大部分と福岡県の一部に行われる東京式アクセントのほかは、東京アクセントでも京阪式アクセントでもないアクセントであるところから、学生も地域差を一番強く感じたのであろう。京都出身の学生は、福岡市ではことばが聞き取りやすいが、筑後地方の久留米市や大牟田市ではわかりにくいと言ったが、これは語い、語法のほかにアクセントが関係していると思われる。

次に、コミュニケーション、ギャップのもとになっている語い、語法について少し述べてみたい。理解を妨げるのは単語のほかに文末表現である。文末には活用語の語尾があったり、音節の短い助動詞や助詞が来たりすることが多く、それが発音も含めて方言の特徴の一つを形づくっている。九州地方の方言に「セカラシカ」(＜セカラシイ＝忙しい)という形容詞がある。意味がわからなかったという学生が多かったが、「セカラシイ」は広辞苑にも載っているこ

とばで西日本の各地に方言として残っている。そして、セカラシイがある程度わかったとしても、セカラシカとなるとわかりにくくなってしまう。終りのカは「ヨカ」(<ヨイ)のように形容詞の語尾が形容動詞のカリ活用系の形のカになったもので九州にはその地域が多い。さらに「ヨカ」だけならば理解できても「ヨカトヨ」と言われると意味を考えてしまう学生もいた。博多弁の一つの表現としてテレビ番組が取りあげた「トットット」(＝取ってます)の形、「～シトト」も「ナンシヨトヤ」(＝何をしてるの)も、他の地方の出身者にはわかりにくい表現になる。逆に、福岡出身の学生がわからなかった文末表現に中国地方の「～ジャキ」(＝～だから)があった。

福岡で聞かれる文末表現でユニークなのは「食べきらん」(＝食べられない)である。他の地域の出身者にはわかりにくいニュアンスを持つことばである。この可能的助動詞「キル」は福岡県と大分県の一部に相当する豊前方言などにあって、前田勇氏によれば不可能の言い方が三通りになるという。①行かれん、食べられん、など ②行けん、食べれん、など ③行ききらん、食べきらん、など そして①の「食べられん」は全然、食用にならないとか、食用になっても食べることが禁止されているとかいう場合に使われる。つまり超能力、能力を越えている場合である。②の「食べれん」は満腹とか何かの障碍で食べることができない、不能の場合である。③は理由の如何は問題でなく能力がないか極めて弱い場合で、無能を意味する。これほどの区別はほかの方言にもなく、大阪弁では①の超能力と②の不能を「食べられへん」③の無能を「よう食べん」というように区別する¹¹⁾。共通語にはそうした区別はなく「食べられない」一つである。

九州方言の文末表現をもう一つあげると、「あつかばい、あついばい」の「ばい」がある。これも「ばい」は「わい」からきた断定の助詞であることを知っていれば、よその地域の人でも意味を正しく理解できるが、そうでないと迷ってしまう。静岡県焼津市出身の学生は「やってみようかしん」(＝やってみようかな)と言ったら相手に通じなかった体験を持っている。福岡のガソリンスタンドでアルバイトをしている学生は、客に「ガソリンを千円がた……(＝千

円ほど)」と言われて意味がわからなかったという。

他に、面接調査のとき出てきた意味のわからなかった福岡方言の単語を見ると、「いっちゃん好かん」の「いっちゃん」(＝全く)「なおす」(＝かたづける、しまう)などがある。「なおす」は、修繕するなど共通語の意味を思い浮べて取り違えを生ずる例でもある。同じような単語に福岡以外でも使われる「いぬる」がある。ある学生は「いのうか」(＝帰ろうか)と言われたのに、「居ようか」と取り違えて一人遅くまで残っていたことがある。「なおす」のように共通語の意味を連想させる方言は使うのを止めようかと思ったことがあると話した学生がいた。その単語の一つは「えらい」(＝苦しい、疲れた)で、日本のかなり広い地域で使われる方言だが、面接調査できいてみても通じない学生がいた。よく取りあげられる方言に共通語の「捨てる」に対応する単語がある。私もはじめて大阪に転勤したときに聞いた「ほかす」(＝捨てる)の意味がわからなかったが、面接した学生にも同じ体験を持つ者があった。北海道や東北地方の大部分では「なげる」というが、これも聞く人は共通語の意味を考えて混同をおこしやすい。

(5) 方言の年齢差と場面差について

方言が使われるか使われないかは、都市と農村の違いなどのように地域によって相違を生じるが、さらに場面によっても違ってくるし、年齢による言い方の違いもある。一般的には若い人より年をとった人の方が方言を使うことが多いと言える。しかし、方言も時代とともに変化を見せており、同じ土地でも高齢者の方言と若い人の方言が異なる例もある。井上史雄氏の研究によれば山形県最上地方の調査で、共通語の「ワカラナイ」に当たる方言は高齢者では一般に「ワガラネ」、若い人では「ワガンネ」に変わり、最上地方の中心都市、新庄付近では高齢者も「ワガンネ」を使う人が多いという¹²⁾。都市部では意識的に共通語を使おうとする場面が多かったり、新しい型の方言が老若両方に使われて範囲も広まったりして、コミュニケーション・ギャップをより少なくしている。今回面接した学生の大部分は、高齢者の方がより多くの方言を使うために

理解しにくくなるという意識は持っていなかった。

前田勇氏は現代大阪弁の特色の一つとして、「多かれ少なかれ東京語ないし標準語のまじった大阪弁である」と述べている¹³⁾。そして大阪弁の具体的な変化の例として、東京弁で「映画を見に行かないか」は、現代大阪弁では「映画見に行けへん」となる。もし「行かない」と答えるのなら「行けへん」である。大阪弁の伝統的な言い方は「行かん」となるのだが、今こう答えたとなると、えらそうな口のきき方とか怒った言い方と取られるそうである。大阪出身の学生は「～するさかいに」(＝～するから)という表現を今の若い人は使わないと言っていた。

高齢者が使った方言で意味がわからなかった例を今回の調査からいくつか拾ってみると、福岡県筑後地方の大川市や城島町では「コンナノ時期で忙しくなるね」などと言うが、「コンナノ」は「稲刈の」の意味だという。ある学生は長崎出身の祖母から12月に「さぶくないか」と聞かれて、「寒くないか」という意味かと思ったら「しおからくないか」の意であった。京都府城陽市のあたりでは、高齢者が隣の人を呼ぶときに姓名以外の何か通称を使うので聞き取れなかった。島根県大田市出身の学生はいいさつのとき「まめなかな」と言われてわからなかった。これは「元気かい」といった意味である。岡山出身の学生は、「ひょんげな」(＝変な)は高齢者に多い方言の一つとしてあげていた。

方言を話す場面という点から見ると、日本の各地から集まった学生が大学のキャンパス内で互に語り合うときはまさにふだんの、日常的な場面である。そこでは方言のまじる割合が多くなり、コミュニケーション・ギャップも少なくない。今回の面接調査では、相手の方言をよく聴いてその方言を少しでも覚えることによって仲間意識が高まると話す学生が何人もいた。その中でおもしろい現象をきいた。あるサークル活動の場である。他のサークルにも共通した現象かどうかは調査できなかったが、そのサークルでは各地の方言を取り入れた独得な「サークル内共通語」が生まれているという。つまり、いくつかの単語や文末の助動詞、助詞が採用されてメンバーがともに使うのである。一例として「ぬくい」を「あたたかい、あつい」の意味に必ず使う。「ぬくい」という

方言は東北地方から九州地方にわたる広い範囲で使われている。学生にとってもことばに対する抵抗感が比較的少ない単語の一つでもあるのであろう。第一経済大学のある福岡のことばは、意識的に多く取り入れているという。地方共通語や新しい方言がある地域に定着することとは異なるが、学生生活が生み出す言語行動の一つとして興味深い現象である。

引用文献

- 1) 水谷 修「話しことばと日本人」創拓社, 1989, p.105
- 2) 渡辺吉銘「会話分析にみる日・韓コミュニケーション・ギャップ」『日吉紀要, 言語・文化・コミュニケーション No.1』1985, 慶応大学, p.142
- 3) 柴田 武「標準語, 共通語, 方言」『ことばシリーズ6 標準語と方言』1977, 大蔵省印刷局, p.23
- 4) 真田信治「日本語のゆれ 地図で見る地域語の生態」南雲堂, 1983, p.103-105, p.161-163
- 5) 上村孝二「九州の方言」大石初太郎ほか編『方言と標準語—日本語方言学概説』筑摩書房, 1975, p.336
- 6) 山本俊治「女子学生にみられる大阪方言の動態」『方言研究叢書第5巻』三弥井書店, 1975, p.240
- 7) 菅野 謙「マスコミと言葉の変化」『ことばシリーズ28 言葉の変化』1988, 大蔵省印刷局, p.63, 64
- 8) 前田 勇「大阪弁」朝日新聞社, 1977, p.48
- 9) 堀井令以知「京都のことば」和泉書院, 1988, p.27
- 10) 上村孝二 前掲書, p.344
- 11) 前田 勇 前掲書, p.121, 122, 126
- 12) 井上史雄「新しい日本語—＜新方言＞の分布と変化」明治書院, 1985, p.4
- 13) 前田 勇 前掲書, p.48